

2007年度学生自治会執行部活動総括

2007年度学生自治会執行部
委員長 今井 英貴

2007年度では「広報活動の強化」、「部およびサークル、各外局（体育常任委員会、音楽芸術団体連合会、ゼミナール協議会、緑丘祭実行委員会）との連絡および協力体制の強化」、「自治会費未納問題の対処」、「学生自治会内部の意識向上」を目標に活動を行ってきた。

以下にて2007年度学生自治会執行部の活動をまとめる。

1. 学生自治会活動内容の広報

2007年度は一般学生に対する広報活動の強化のため、広報誌（ShowTime）の改善を行った。学生自治会の活動をあまり知らない一般学生にとって、活動内容を知る主な情報源は広報誌である。そこで、学生自治会は一人でも多くの学生に広報誌が読まれることにより活動の認知度が向上することを目標に掲げ、広報誌配布の事前告知、従来の第二外国語教室とゼミ室での配布に加え一般教室および学生会館での広報誌の配布、記事内容の変更などを行った。その結果、多くの学生に広報誌を受け取ってもらい、広報誌の改善に成果があったといえる。

2008年度においても現状に満足せず、多くの学生に広報誌を読んでもらうため引き続き工夫をし、学生自治会の認知度向上に努めてほしい。

2. 自治会費未納問題の対処について

自治会費納入は全学生にとっての義務であり、学生自治会では自治会費

未納問題を解決するため様々な方法を試みている。

自治会費の主な使用用途は、行事運営の費用や各外局への配分金である。したがって、仮に自治会費が無ければ新歓活動や緑丘祭などが開催できなくなり、学生生活に影響を及ぼすことになる。また、数年後の自治会費の納入額を考えるに、近年商大への入学者数が減少をしていることから更なる減額が予想される。したがって、自治会費未納対策の重要度は今後増すに違いない。

2007年度における未納者対策としては、未納者に対する郵便の送付、学生番号の掲示、部・サークルに対する未納者リストの提出などを行った。また、広報誌で学生自治会の認知度向上を進めることにより、多くの学生に学生自治会の活動が伝わるように務めた。しかし、前述の対策でも完全に未納を無くすことはできなかった。今後は更に自治会費の納入率を上げるため入学時の説明の強化など、自治会費納入を促す方法を検討する必要があるだろう。自治会費未納は例年必ず問題となっているが、2008年度は納入率が更に上がるよう、様々な方法を試みて欲しい。

3. 部およびサークル、各外局との連絡および協力体制の強化

2007年度は各外局や部との連携に注目をし、協力体制の強化のため前年度よりも各種ミーティングでの説明内容を詳しくするように心がけた。しかし、それでも不十分だったためか、各外局や部・サークルに伝えたい内容が正確に伝わらない場面があった。説明の機会と時間をもっと多く取るべきだったと振り返ると同時に、内容がより伝わりやすいように工夫をすべきだったと反省する。2008年度では各外局や団体との協力体制を強めるため、各種連絡には更に細心の注意を払ってもらいたい。

4. 学生自治会内部の意識向上

2007年度は学生自治会の活動を円滑に行うため、自治会役員それぞれが学生の代表であるという意識の向上を目指した。そして、そのために前述3でも述べたが、学生自治会内部では活動がある毎に役員へ説明を詳しくするように心がけた。説明方法に関して私に至らない点もあったが、学生自治会の活動自体は途中で中断することもなく、継続的に行えたことから円滑に進んだといえるだろう。しかし、活動が円滑に進んだことが役員意識の向上によって達成されたとは感じられなかった。

学生自治会という団体の活動は円滑に進むだけが重要ではなく、役員個々人の意識も大切であると思う。なぜならば、学生自治会役員は学生の代表として様々な活動の決定を行うため、そこに学生生活の向上を目指す主体的な気持ちが必要となるからである。2007年度においては、全ての役員がそのような意識を完全に共有することができなかったことを反省する。

役員の意識の向上は学生自治会が常に向かい合わなくてはならない問題である。2008年度は各役員がそれぞれ学生の代表としての意識を持ち、主体的に活動を行うように努めてもらいたい。

以上が2007年度総括である。任期を終えた今、過去を振り返ると改善をすべきだったことが多く存在することに、「もっとこのようにすべきだった」と考えてしまう。2008年度においては悔いが残らないような活動をしてほしい。

2008 年度学生自治会執行部活動方針

2008 年度学生自治会執行部

委員長 菅村 朋美

今年度は「広報活動」「自治会費未納対策」「学科選択支援冊子の発行」「自治会内部の意識向上」「次代につなげる取り組み」の5つを活動の柱とする。

1. 広報活動

昨年度は学生への広報活動の強化を目指し、主に広報誌の充実を進めた。自治会費を納入している学生に対して、自治会の活動を知らせることは私たちの義務であるが、自治会の活動は学務課の職員の方や先生方の協力なしには成り立たない。そこで今年度は広報誌に加え、学園だよりやホームページでの広報活動にも力を入れ、学生はもちろん、大学関係者へもアプローチしていく。

まず、広報誌についてであるが、昨年度は「広報誌をまずは読んでもらう」という点に主眼を置き、学生が楽しめる記事の充実を進めた。結果、学生に広報誌の存在を知ってもらい、手にとってもらおうという第一のステップはクリアできたと言えよう。ただ、「学生に自治会の活動内容を伝える」という本来の目的が薄れていたように感じる。そこで今年度は「広報誌を媒体に自治会の活動を広く伝える」という次のステップに進むべく、自治会の活動をわかりやすく、楽しく伝えるということに力を入れていく。もちろん、昨年度まで力を入れてきた学生が楽しめる記事・有益な情報の提供記事の質を下げることなく、広報誌全体の質の向上を目指す。

次に、学園だよりでの広報活動についてだが、昨年結成された「学園だより学生編集委員」と連携し、学園だより上で新歓や学生大会など、自治会の活動を紹介させていただく。学園だよりは多くの大学関係者に読まれており、学生以外へのPRとしては有効といえる。自治

会の活動を多くの方に知っていただくことで、今年度以降、自治会及び外局主催の諸行事においてご理解、ご協力をいただけることを期待したい。

最後に、ホームページについてである。昨年秋よりリニューアルし、コンテンツの充実を進めてきた。今年度はこれを有効活用し、行事の報告をこまめに行い、多くの方に自治会の活動をリアルタイムで紹介していく。また、在学生及び受験生へのお知らせページを新たに作成し、部・サークルへの新たな連絡方法の1つとしての利用を検討する。

2. 自治会費未納者への対策

2008年度から新入生の自治会費納入方法を変更し、生協・緑丘会との完全一括納入を実施している。これまでも二団体との一括納入を実施し、一定の成果を挙げてきた。しかし、今年度からの完全一括納入では、生協出資金のみ、自治会費のみの支払いが出来なくなったため、より多くの新入生に自治会費を納入していただけた。

しかし残念ながら、それでも未納は完全になくならない。未納対策として、今年度は昨年度同様、未納者への郵便送付、学生番号の掲示、部・サークルへの未納者リストの提出と未納者がいる部・サークルへの配分金削減の他、「納入の義務及び使途の周知」をテーマに新たな対策を実施する。具体的には、広報誌やホームページに自治会費の納入の義務やその使途について説明する記事を掲載する。また、新入生に対しては自治会オリエンテーションや合格時の送付書類で自治会費について詳細に説明を行い、1年次から自治会費について正しく理解してもらおう。また、校内での掲示にも力を入れ、納入だけでなく、遠征費補助などの自治会費の積極的な活用を促していく。

3. 新たな自治会費還元方法の模索～学科選択支援冊子の発行

自治会費の還元方法は、毎年問題となることの1つである。自治会傘下の部・サークル以外に所属する学生に、自治会費を還元することは難しい。そこで私たちは全商大生に関わることで、何か役に立てない

か模索してきた。

全ての商大生が体験するのが2年次に進級する際の「学科選択」である。しかし、学校から配布されるシラバスを見ても得られる情報は限られ、多くの学生が先輩などから口コミで得られる情報を頼りにしている。そこで、私たちは「商大生の目から見た4学科+教職課程」の情報を提供するため、学科選択支援冊子を発行する。冊子の内容は、各学科の教授、学生へのインタビューや時間割紹介などを中心とし、読者が楽しく読め、学科所属後の生活がイメージできるようにしていきたい。11月～12月上旬の発行を目指し、6月から計画的に取材等を進めていく。

4. 学生自治会内部の意識向上

毎年、自治会内部の意識向上が問題となっている。昨年度総括においては、「個々の意識が問題」とあったが、私は執行部内である程度まとめた企画、行事を外局役員の方（各団体の委員長、会計）にお願いしてお仕事をしていただいている現状では、役員の方々が活動に受動的になってしまうのも無理はないように思う。新入生歓迎活動など、大きな行事の企画段階から役員に関わっていただくのは代替わりの時期が合わないこともあり困難であるが、経験をもとに意見を述べていただくことは可能であろう。今年度は大きな行事のあとの反省をしっかりと行い、来年度に向けて改善点を議論していく場を設ける。それぞれが意見を持ち寄り、議論することで自治会活動の中心を担っているという意識を全員に持っていただくため、連絡事項の伝達だけのミーティングにならないよう、個々の意見を引き出すミーティングにするため工夫をしていく。

5. 次代につなげる取り組み、学内団体との協力

毎年中心となるメンバーが入れ替わることで、継続して同じ問題意識を持ち、活動していくことは困難である。しかし、自治会が抱える問題の多くは1年間で解決可能なものではなく、解決に向けて、長期

間の継続した活動が求められる。そこで今年度は、次年度の中心メンバーとの連携を密にして活動する。後輩たちと毎週のミーティングで議論を重ね、全員が同じ問題意識を共有でき、次年度を見据えた活動ができる環境づくりをしていく。また、行事ごとに執行部と外局役員とでしっかりと反省を行い、問題点を洗い出した上で改善策を検討する。こうすることで、1つの問題に継続して取り組むことの出来る組織にしていきたい。

また、自治会内部の団体に留まらず、学内の学生団体に呼びかけ、必要などときには相互に協力できる関係を築きたい。学内の部・サークルの活動状況を知り、それぞれの代表者と連絡が取れる体制の構築に努めていく。

以上が 2008 年度学生自治会執行部活動方針である。昨年度の反省を生かし、現在の状況に満足することなく日々向上できるよう、今年度も活動していく。

自治会の活動は学生の皆さんの協力なしには成り立ちません。今年度も皆さんのご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

第 61 期体育常任委員会活動総括

第 61 期 体育常任委員会

会長 石上 雄介

第 61 期体育常任委員会(以下、体育会とする)は、「女子部活の活性化」「体育会知名度の向上」「役員意識の向上」の 3 つを活動方針に掲げてきた。

① 「女子部活の活性化」

近年、体育会系部活・サークルの加入率は減少傾向がみられ、大学全体としても徐々に活気を失いつつある現状を打破すべく、部活・サークルに入部するか否か迷っている学生をその気にさせることが必要であった。そこで、改善余地の伸びしろが大きい女子学生をメインターゲットとして改善を行った。

現状を分析したところ、「女子もプレーヤーとして活動出来る部・サークルが少ない」「マネージャーが飽和状態」「女子サークルの活動が不安定」といった点が“環境要因”となって女子学生の加入率は伸び悩んでいた。そこで、チアダンスサークル・女子ハンドボールサークルの両団体の部昇格を行い、練習場所の確保と財政面から活動を支援し、活動の安定化により継続して活動しやすい部活作りをサポートした。

今後、女子部活の活動がしだいに活発化し、周囲の女子学生の運動欲求を徐々に吊り上げ、大学全体が活気付いてくれることを願う。

② 「体育会知名度の向上」

体育会行事(結コン、スポーツ大会、若者合宿、LA)を通じて、知名度の向上を狙った。

開催日時・詳細などの連絡や掲示時期を早め、一人でも多くの学生が参加してくれるよう努めた結果、幸いなことに参加が倍増した行事もあった。

知名度の向上とまではいかないにしても、多くの学生に参加してもらえたことを嬉しく思う。今後はイベントの事前・事後にアンケートをとり、内容の向上に努めることで「小樽商科大学体育会」の知名度が学内全体に広まることを願う。

しかし、改善の余地が残った行事もあった。それは「スポーツ大会」である。「春のスポーツ大会」「秋のスポーツ大会」と題し、今後毎年の恒例行事とすることで、大会の認知度及び開催規模を高めていく計画であった。しかし、企画時期が若干遅れたことや、イベント告知用ポスターの質の低さが課題となった。今後多くの学生から注目と期待を集められるよう、企画時期を早めて内容を充実させる話し合いの時間を増やすとともに、ポスター製作に一層趣向を凝らす必要がある。

③「役員意識の向上」

一向に改善が見られず、体育会運営の中で最も叫ばれている課題であった。

粗大ゴミが投棄され荒廃していた体育会室を大清掃し、役員が気軽に立ち寄れる環境整備を行い、居心地の良さ・親近感を持たせることから改善を行った。

また、役員の一部署(事業、競技、総務、管理)配属を再度行い、各役員に自分の所属部署を認識させることで、仕事意識の芽生え・向上を促した。更に、各部役員の引継ぎがある程度進んだ時期を見計らって「体育会研修」を行い、体育会への理解を深めてもらえるよう努めた。時には各部の主将とも連携をとって体育会運営が出来た為か、昨年度に比べ、若干は役員意識が向上してくれたと感じている。

②、③の活動方針は、第 60 期から始まった「体育会改革 3 年構想」の内容であり、次期で最終年を迎える。2 年目としての役目は十分に果たせ

たと感じている。

今一度皆に理解して頂きたいのだが、私がこれまで述べてきた体育会活動内容の目的は、体育会系部活の活動を支えて学生の活気を促すことで、結果「我らが小樽商科大学」を発展へと導くことである。第 62 期体育会では役員はもちろん、各部からより一層の理解と協力のもと、本会及び小樽商科大学の発展の為に最善を尽くしてもらいたい。以上をもって、第 61 期体育常任委員会活動総括とする。

第6 2期体育常任委員会活動方針

第6 2期 体育常任委員会

会長 高橋 涼

第6 2期体育常任委員会（以下、体育会とする）は、前年度と同様、「女子部活の活性化の継続」「体育会知名度の向上」「役員意識の向上」を基本方針として掲げる。

① 女子部活の活性化の継続

近年の学生の体育会系部活・サークル加入率の減少を受け、昨年度から継続して、勧誘活動の強化の一環として女子部活・サークルの活動の活性化に力を注ぐ。

男女混合の部活で女子プレーヤーと一緒に活動する部活もある。しかし特に「女子だけの部活・サークル」への対処が直接的に、女子学生加入率の向上につながると考えたため、この部分に焦点を絞って、話を進める。

今年度は、更に、女子部活の活動を活性化し、新たな部員獲得を目指す。本大学には女子部活の数が少ないため、「本当は部活にプレーヤーとして入りたかった。」もしくは、「マネージャーをやっているうちに、自らがプレーしたくなかった。」という女子学生は少なくないはずである。そこで、昨年度から取り組んできた女子部活の活性化を継続させることで、女子学生の意欲を掻き立て、女子の新サークル・団体の発足を目指す。そのために体育会がその相談窓口となるような体制を作っていく。

また、現在ある女子部活の宣伝活動も積極的に促していく。既存の女子部活の部員数は正直なところ決して多いとは言えない。この問題を改善していかないと、これから新団体を発足させようとしている学生へのPRにつながらない。各団体と積極的に議論を重ね、体育会共々、女子部員の獲得を目指していく。

② 体育会知名度の向上

これも昨年と同様、体育会がどのような組織であるかを学生に知ってもらうために、各イベント（スポーツ大会・結団コンパ・若者合宿・LA など）により多くの学生に参加してもらえるように努めていきたい。今後の対策としては、年々参加者が増えていくよう、参加してくれた学生にアンケートを取るなどしてイベント内容の充実を目指していく。特に Leaders Assembly(LA)への各部活の参加を義務化とし、体育会の重要性を学生に植えつけていくことを目指す。

また、昨年度の活動を踏まえ、課題となったスポーツ大会の充実に向けた活動に力を入れる。今年度については10月の火曜日・木曜日の午後の時間を使って4種目程度行いたいと思っている。今年度は、体育会にあまり縁のない一般学生の参加を促すために、企画の早期告知、告知用ポスターの質を上げ、ビラ配りを実施し、多くの学生の参加を目標とする。

③ 役員意識の向上

今年度の具体的な目標としては、体育会ミーティングへの出席率の増加が挙げられる。体育会の活動の基礎はミーティングにより決定され、各部活へ伝えられる。しかし、そのミーティングへの出席率が悪いと、その内容が各部活へうまく伝達されずにトラブルを招くことになる。欠席した際のペナルティも含めて、この点の改善策を考えていきたい。出席率を上げることにより、体育会と各部活との連携もうまくいくようになると思う。

また、体育会役員の事業部・管理部・競技部・総務部への部署配属をより一層徹底させ、各部役員の引継ぎをスムーズに行えるような体制作りをしていく。引継ぎの際には、体育会研修を行い、新役員としての意識を植え付け、さまざまな仕事の効率化を目指していく。

②、③の活動方針は2年前から始まった「体育会改革3年構想」の最終年度であり、今年度は総決算として体育会の真価が問われる年となる。これまでやってきたことを結果として残せるようにしたい。①については特に目標期間は設けず、これから続いていく体育会の課題として次代の後継者に引き続き行ってもらおう。

2007年度音楽芸術連合会総括

第15代音楽芸術団体連合会

会長 高橋 慶太

第15代音楽芸術団体連合会（以下、音芸連）は、『各行事の成功と拡大』『充実した調整会議と広報』『サークル会館大練習場のクリーンキャンペーン実施』を方針に掲げ活動してきた。

1. 各行事の成功と拡大について

音芸連の定例行事である、新歓コンサート、ジンギスカンパーティー、クリスマスパーティーであるが、それぞれ参加者は例年通り好調であり、音芸連自体の盛り上がりが見られた一年であったように思う。

まず、新歓コンサートであるが、序盤から新入生の入場者数は例年と同等、またはそれ以上で、各サークル充実した勧誘活動を展開できたのではないかと思う。合同説明会と時間を少し被せたことで、各サークルが新入生を連れてきやすかったのではないかと思う。若干時間が押したり、指揮及び連絡系統に不備があったりしたが、問題にならない程度であり、成功を収めたといってもいいだろう。これからも是非続けていって欲しい。

次にジンギスカンパーティーであるが、音芸連の知名度向上と各サークル間の交流に重点を置いた行事のはずが、それぞれのサークルで固まってしまったのは残念である。今後も続く大きな課題であると思う。また、常識に基づく最低限のマナーに関しても、守れていないサークルが見受けられたのは大変遺憾であった。定められた時間を過ぎてもいつまでも騒いでいたり、人数が多いからといって許可なく勝手に焼き台を2つ使ったり、進行の妨害など、挙げればキリがない。参加者が多くなれば多くなるほど、色々と問題は起こりやすくなるものだが、あまりにも酷い事態が続くようでは開催を考えなければいけなくなってくる。そのようにならないように、指揮系統の強化や各サークルへの呼びかけ、モラルの上昇に努めていって欲しい。

そして、各サークルで催される定期演奏会では、自治会広報誌への記事掲載や、定期演奏会新聞を復活させたのだが、認知度は低かったので、まだまだ改善の見込みがある。各サークルをバックアップできるように頑張っていて欲しい。

最後にクリスマスパーティーであるが、秋頃に新サークルが2つ新規加盟した（後述）ことと、宣伝により、参加者の減少傾向に歯止めがかけられたのが何よりの救いであった。毎回、会場の狭さが問題視されていたのだが、思い切って立食形式にしてみたところ、概ね好評であり、スペースの確保にもなり成功だったと思う。各サークルの発表の際には指示がなくても前にいる人がしゃがんだり、終了後の温かな拍手があったりするなど、各人が思いやりの行動を取っていたのはジンギスカンパーティーとは異なり、大変良かったのではないかと思う。これに満足せず、次回はさらによい会をめざして欲しい。

2. 充実した調整会議と広報について

毎週水曜は音芸連の MT を行っており、第二または第三週の水曜に次の月の、サークル会館の大練習場及び中練習場の使用割り当ての調整会議を行っている。

こちらについては掲示を利用して会議の告知をした。これが後述する新規サークルの加入につながったのであるが、体育会の部活からも学務課を通して、MT に使用したい、冬季の筋トレの部屋として利用したいなどの要望もあり、急ごしらえの制度にしては、効果があり、なかなか拡充できた会議になったと思う。このようなことが音芸連の知名度拡大にもつながっていくものだと思っている。これからもより充実した会議を目指して引き続き宣伝して欲しい。

また、広報についてだが、前年度方針として HP の定期的更新を掲げたが実行ができず、残念であった。次代にはこのようなことがないよう、HP の更新も定期的に行って欲しい。

3. クリーンキャンペーンの実施について

クリーンキャンペーンとは月に一度のサークル会館大練習場及び中練習場の清掃のことである。こちらは前もって月ごとに各サークルに振り分けて、会議上では進行させることができたのであるが、清掃に立会うことができず、結局は各サークルの良心に任せる形になってしまい、事実把握ができなかったことが大きな反省点である。次年度より確実にこれを行って行って欲しい。あまりにも汚い状況には直面していないので、各サークルがきちんと行ってくれたものと信じているが、立会いの必要性は感じた。

4. 新規加入について

当代での新規加入サークルは2つあり、よさこいソーランサークル『翔楽舞』とダンスサークル『AXCEL』である。正式な加入条件は制定されておらず、加入に関しては様々な論が飛び交ったが、今までになかった新たな条件を作成することにより、意見の一致を迎えた。

後に述べる通りである。

新規加入に関しては、まずは準加盟サークルとなり、そして更なる条件のクリアで正規加盟を迎えるというものである。

音楽芸術団体連合会入会条件

- ・ 芸術に関連した舞台発表ができるものに限る。
- ・ 頻繁に練習があり、一般に公開された発表の場があること。

準加盟団体から正規加盟団体への昇格について

- ・ 入会から約1年以上の監察期間を設ける。
- ・ サークル単独名義での定期公演を行うこと。
- ・ 組織として成立すること。(代表、会計など)

先に挙げた2つのサークルは音芸連によって、十分に入会条件を満たしていると承認された。よって現時点では準加盟団体に位置する。扱いの違いとしては、自治会からの予算が下りるか否かであり、それ以外に大きな違いはなく、全力でバックアップしていくものである。なお、先に挙げた入会条件であるが、今年度から効力を発揮するものの、学校での公式な発行誌への掲載が間に合わなかったため、次代での掲載をめざして欲しい。

以上により、現在の音芸連は6つの正規加盟団体と2つの準加盟団体により成立しているものとする。

第15代の1年を振り返るとまさに『変化の年』であった。改革によって吹き込まれた新たな風に乗って、音芸連の更なる発展が成されることを願う。

以上を持ち、第15代音楽芸術団体連合会総括とする。

2008年度 音楽芸術団体連合会 方針

第16代 音楽芸術団体連合会
会長 佐藤明日香

今年度の音楽芸術団体連合会（以下音芸連）の方針として以下を定める。

- 1、定例行事の改善
- 2、積極的な広報活動
- 3、クリーンキャンペーンの徹底
- 4、規約の見直し

具体的には以下の通りである。

1、定例行事の改善について

定例行事とは新歓コンサート、ジンギスカンパーティ、クリスマスパーティの3つである。

まず、新歓コンサートに関してだが、去年は特に問題もなく、入場者数の増加など、成功を収めたと言っていい。しかし、ジンギスカンパーティとクリスマスパーティの趣旨として挙げられる、普段は接点を持たないサークル同士の交流、一般学生に音芸連のことを知ってもらうという点が満たされず、例年問題になっている。サークル同士の交流に関しては、なにか交流出来る企画を設けるなど、音芸連一丸となり、改善にあたる。一般学生に関しては、ビラを配ったり放送を行うなどの積極的な告知を行っていく。この2つと並行して、各行事での音芸連役員による監視及び警備を行う。参加者が増えるほどに安全面での配慮をすべきなので、これを機に強化したい。

2、積極的な広報活動

今まで音芸連は HP の更新を行っておらず、広報活動が疎かになっていたので今年度は力を入れていく。HP には定例行事での告知だけでなく、各サークルの公演も告知していく。なお、この公演の告知は自治会広報誌への記事掲載や定期演奏会新聞でも行っていく。

さらに、サークル会館大練習室の調整会議を事前に掲示を行い告知しておくことで、音芸連に所属している団体以外にも使用してもらえるようにしていく。

3、クリーンキャンペーンの徹底

サークル会館にある大練習室及び中練習室は、ほとんどが音芸連に所属しているサークルが使うので、各サークルに前もって月ごとに振り分けて清掃活動を行う。今年は事前に清掃日を報告してもらい、清掃の確認を役員が行う形を取りたい。

4、規約の見直し

今まで音芸連には正式な入会条件が存在していなかった。そこで、新規で入会の申し出があったことを機に正式な入会条件を定める。準加盟団体として1年の監察期間を経て、組織としての成立が認められれば、正規加盟団体として予算が割り当てられる。

以上は学校での公式な発行誌への掲載が間に合わなかったため、今年度中の掲載を目指す。また、音芸連の規約は94年以降見直しを行っていなかったもので、規約の見直しを行い、こちらも同様に掲載する。

以上、今年度の音楽芸術団体連合会の方針である。
これを軸に、今年度も団結してさらなる音芸連の活性化を図っていく。

第 55 回緑丘祭実行委員会活動総括

第 55 回緑丘祭実行委員会

委員長 上村 佳弘

第 55 回緑丘祭は、去る平成 19 年 6 月 28 日(木)から 7 月 1 日(日)の 4 日間の日程で開催された。4 日間通してあいにくの曇り空であったが、パンフレットやうちわの配布状況から、商大生だけではなく多くの市民が来場していたものと思われる。

活動方針において挙げた、第 55 回緑丘祭の目標は次の二つであった。

- 1、「第 55 回」という個性を出す企画作り
- 2、来場者の拡大

1、「第 55 回」という個性を出す企画作りについて

今回の企画運営に当たっては、過去に行われてきたような企画の内容とは重ならないように心がけ、企画担当で綿密に打ち合わせをした。例えば、クイズ企画ならとことんクイズというものにこだわるなど、より深みが出るようなものにした。このようにした結果、参加者が楽しめることは当然として、見ている人にも楽しめる企画を行うことができた。一般公開日の土曜日、日曜日は商大の学生だけではなく、小学生や他の市民の方にも参加していただいたので、とても満足している。

また、丘美会による絵画展や小樽商業高校吹奏楽部による演奏を無事に行うことができた。特に、吹奏楽部の演奏の時にはステージの前が観客であふれ、大盛況のうちに終わることができた。今後もこのような地域との連携を図るような企画を続けて欲しい。

2、来場者の拡大

結論から言って、この目標は十分に達成することはできなかった。小樽市内の宣伝は例年通りに行うことができたが、札幌への宣伝を始める時期が遅くなり予定していた、テレビ・ラジオへの出演は実現できなかった。また、北海道大学の大学祭実行委員会との連携も、こちらの提案の時期が遅く実現できなかった。第 56 回ではぜひ実現して欲しい。

その中で、成功したものがある。それは、3号館内に設置した子供向けのスペース「子どもの王国」である。ここには絶えず人が来て、常に人気であった。室内には塗り絵や折り紙などを置き、子どもが退屈しないような空間作りをしたことが、人気の理由であろう。

商大と小樽駅を結ぶシャトルバスも、引き続き人気であった。今回から、小樽駅へ向かうほうにも運行を始めたので、より利便性が増したと思う。

一方、来場者の拡大につれて車で来られる方が増加し、駐車違反の問題が発生してきた。例年、問題として生じてはいたが、今回はついに警察が出動する事態となってしまった。次回以降、マイカーでの来場を控えさせる告知を徹底させて欲しい。

新たな問題として、ゴミの処分方法も挙がってきた。昨年までゴミの処分方法に関しては、委員会内でルール化されておらず、商大に出入りする業者に処理してもらっていた。しかし、今年は屋外で団体が営業した後に出たゴミが、カラスに荒らされ祭り終了後の朝に大急ぎで処分をすることになった。緊急で業者を呼んだので、予算にはその費用は計上しておらず、大きな赤字が生じることとなった。このことについては、正確な引継ぎがなく、あやふやなままで対応してきた委員会の責任である。学校と協議の上、次回以降必ず明確化させるべきと考える。

部署部門

- 総務・・・書類担当者とレンタル担当者で話し合いを重ね、前もって準備を進めていたので、開催にあたって、特に問題はなかった。ただ、物品の調達に著しく不備があり、各部署とのこまめな連絡が必要だと感じた。来年度はより綿密に連携を取ってもらいたい。
- 財務・・・緑丘祭の資金や領収書の管理をきちんと行うことができた。しかし、支出の部で予想外に出費してしまった項目があったので来年は予算内におさまるように予算を組んでほしい。
- 広告・・・今年は小樽や札幌の企業のご支援のおかげで80万円という当初の目標を無事達成することができ、結果的に見ると成功したのではないだろうかと思う。反面、仕事していく中で部署間、部署員の連携をもっと強化する必要があると感じた。また、支援してくださる方に、気持ちよく支援していただけるように今以上にプロモーション技術や対応能力が必要となる。
- 広報・・・広報は活動として、例年通りに緑丘祭のパンフレットづくりやポスターの作成を行った。パンフレットにミスがあるなどの反省点が非常に多かった。また活動は固定化されているので、次は改善してもらいたい。
- 出店・・・前回とほぼ同じ出店団体数であった。今回も電気に関するトラブルはなかったが、コードを引く時に雨が降っていたので、雨対策をしっかりとすべき。団体を管理するところで、うまくいかなかった部分があったので、改善すべきである。
- 装飾・・・今年度の装飾は従来個別に行っていた装飾活動を統合し、作業の効率化を図ることを目標として活動を行った。結果、作業の効率化自体は出来たが、新たに更なる関係各所の理解と協力が必要であると感じられた。来年はこの事を解決する事が望まれる。

統括・・・統括という部署は久しぶりに復活した部署でしたが、全体をうまく統括することができず、機能しなかった。原因は、副委員長の仕事と統括という仕事が重複していたためではないかと思われる。

最後になりましたが、自治会執行部、体育常任委員会、音楽芸術団体連合会、ゼミナール協議会の皆様、そして第55回緑丘祭に協力していただいた皆様に深く感謝申し上げます。この場を借りて深くお礼申し上げます。6月末に開催予定の第56回緑丘祭も、よろしくお願いたします。

第 56 回緑丘祭実行委員会 活動方針

第 56 回緑丘祭実行委員会

委員長 工藤 和寛

第 56 回緑丘祭テーマは「^{ブン}Boum! ^{ブン}Boum! ^{ブン}Boum!」とした。これはフランス語であり、日本語では「(胸が高鳴るような) ドキドキ」という意味である。当たり前のことであるが、来場者の方々に楽しんでいただけることを第一と考える「祭」をより盛り上げ、更なる「ドキドキ」を共感したいという願いの下で決定した。無論、その裏で制作側として努力を怠ることないよう一致団結して作り上げていきたい。

また、委員会の活動の原点として緑丘祭を楽しんでもらえることを考えるのは重要であるが、どれだけ多くの来場者に恵まれても、周囲の環境がしっかりしていない限り、そちらに気が行ってしまい無意味なものになってしまう。それ故、まずは一般の方々含め、来場者を受け入れる体制をしっかりと整えることが第一である。その上で、以下の 2 つの目標を掲げる。

目標

1. 緑丘祭全体、特に企画を中心とする内容の凝縮
2. 緑丘祭に関わる周囲の環境整備

1. 緑丘祭全体、特に企画を中心とする内容の凝縮

第 56 回緑丘祭の特徴として 3 日間日程での開催が挙げられる。近年は 4 日間日程で開催してきたが、今年度の委員の中で、企画内容に伴わない日程での開催は避けるべきであり、薄い内容の企画で数をこなすことよりも、より内容の濃い企画作りを徹底することが一番であるという意見が多かった。そこで企画内容の面から討議を重ねた結果、4 日間だった日程を 3 日間にするという方法を取ることにした。

決して4日間日程からの「縮小」ではない。新たな提案としての「3日間日程」だということを理解していただきたい。「ランチパーティーとビアパーティーの同時開催」、例年大人気のカラオケ大会から花火へと繋がるような「気分の高揚が持続する企画同士の流動性」など今までとは一味違う感覚で多くの来場者により楽しんでいただけるよう、準備を重ねている。

2. 緑丘祭に関わる周囲の環境整備

環境整備と一口で言っても、多数にわたる。まずは、ゴミ処理問題である。近年の緑丘祭において、来場者へのゴミの分別に関しては常に担当をつけて分別指示を促してきた。その結果、今まではしっかりと分別が成されて来た。しかし、ここで問題としたいのは出店する側のゴミ処理意識である。分別指示を促す担当を置かなかつたことで分別されていないゴミが頻繁に見つかった上、食用油がそのまま放置されていたという事態も発生した。そして更に、緑丘祭終了翌日のゴミ置き場はカラスによって荒らされているという悲惨な状態であった。委員会としてもゴミ分別への注意は喚起してきたが団体の自主性に任せる部分がほとんどであった。そこでまず出店団体への管理意識の徹底を図りたいと考える。委員会側としても最重要課題の一つとして取り上げ、出店団体向けの説明会での分別指示の強化はもちろん、ゴミ捨て場には担当をつけ、しっかりと分別してゴミを捨てているか厳しくチェックを行う。また処理方法からも見直しを図り、今年度はゴミの発生量が多い土日は毎日収集業者を呼び、その日のうちにその日のゴミを処理する形を取るようにするよう学務課とも慎重な討議を重ねる。

次にマイカーでの来場者についてである。前年の緑丘祭ではマイカーでの来場により警察まで出動するほどの事態となってしまったが、今年は小樽市内各所に掲示させていただくポスターにより、マイカーでの来場を控えるよう提示し、その代わりにシャトルバスでの来場を薦めるよう努める。

最後に、アルコールについても環境整備の一つとして考える。泥酔している者が勝手な行動をとっていると、他の来場者がどうしても敬遠することが多く見られる。近年増加する「大学祭でのアルコール禁止」という流れは、大学生を中心とした「生命に関わるほどの無茶なアルコール摂取」が様々な地域で発生していることを考えると、商大もその傾向を無視できないのは確かである。飲酒する側が気持ちよくアルコールを嗜むことは結構であるが、アルコール中毒等を招く事態となるようなことは絶対にしない・させないよう飲酒者へ良識ある行動を望むと共に、販売側の出店団体にも過剰な量の販売を行わないよう注意を促し、あまりにも常軌を逸した行動をとる者に対しては運営側として厳重な対応を取りたいと考える。

以上 3 点（ゴミ処理、アルコール、マイカー）を中心に、どの来場者にも快適に祭を楽しんでいただけるよう、委員会側として努力を重ねたい。

最後になりましたが、緑丘祭の成功に向け今年も各団体の皆様のご協力のほど、よろしくお願いいたします。

2007年度ゼミナール協議会 活動総括

2007年ゼミナール協議会

代表 小野 誠

1. 総括

2007年度のゼミナール協議会では、役員を選出に関する問題とゼミナール協議会の認知度における問題を改善していくべく活動を行ってきた。具体的な活動としては、例年通り、ゼミナール間交流レクリエーション、ゼミナールオリエンテーション、インナーゼミナール大会を開催することで、各ゼミ内及びゼミ間の繋がりを強めて、ゼミナール協議会の認知度を高められるよう努めた。しかし各行事の運営上で人員不足な感があり、ゼミナール協議会の認知度の向上にあまり効果を上げなかったのは反省すべき問題だ。ただ少人数ながらも、各行事を滞りなく運営していったのは良かったポイントではないかと思う。今後は上の反省を生かし、人員の確保が不確定な随時募集ではなく、年度の最初にある程度の人数を確保できるようにしてほしい。また長期的に活動への参加を呼び掛けることで、ゼミナール協議会の活動とその目的を多くの学生に知ってもらい、ゼミナール協議会そのものの認知度を高めるように活動してもらいたい。そうすることで、役員を選出がスムーズに進むはずである。さらに今年度は引き継ぎが上手くいかなかったので、来年度は引き継ぎをしっかりと行い、次期の役員がゼミナール協議会としての意識を強く持てるよう努めたい。

2. 個別行事報告

①ゼミナール間交流レクリエーション

例年通り、ゼミ間の交流をはかるという目的のもと、ボーリング大会を開催した。2007年度は、前年度より更に多い411人も学生が参加したため、二週連続開催となった。しかし運営で人員不足は特になく、必要最低限の人員は確保できた。次年度は本年度よりもさらに効率的に運営できるような体系を考えて活動して行ってほしい。

②ゼミナールオリエンテーション関連行事

2年次生のゼミ選択をより行いやすくするために、ゼミナールオリエンテーションを開催した。学務課や各ゼミとも連携し、2006年度から採用している各ゼミ幹事の連絡先のデータベースを活用し、各ゼミの幹事と連絡を取り合うことができた。ただ連絡の遅れなどがあり準備段階で慌しくなってしまったのは反省点である。やはり充分な時間をとって各ゼミと連絡を取り合うことが大事だと実感し、今後このようなことが起こらないように努めていきたい。ゼミナールオリエンテーション当日に関しては、今年度も時間のずれはほとんどなく運営することができた。

③インナーゼミナール大会（ゼミ研究発表会）

ゼミの日頃の研究成果を発表する場として、インナーゼミナール大会を開催した。2007年度は、参加ゼミ数は昨年度より若干減り12ゼミの参加となった。見学者は100人を越えたが、告知する時期が遅れたこともあり、もっと増やせたように思う。またここでも連絡の遅れがあり、日程の偏りが起こってしまったのが最大の反省点であった。さらに問題点として、見学者の質疑応答が消極的であったことも挙げられる。これらのことは早めの連絡及びインナーゼミナール大会の目的・意義を十分に告知して、学生により強く参加意識を持ってもらうことで、各ゼミと見学者の活発な意見交換を図ってほしい。当日の運営においては、ただ見学者が質問をしてそれに答える、という形ではなく、感想を言ってもらう等、参加者の積極的な発言を引き出すような司会の方法を探すことで、改善して欲しい。

最後に、ご協力をして下さった、学生自治会の役員をはじめ、各外局や教員の皆様、ゼミなど、たくさんの方々に深くお礼を申し上げます。今後ともゼミナール協議会をよろしくお願い致します。

2008年度ゼミナール協議会活動方針

2008年度ゼミナール協議会

代表 小島 弘照

1. 全体の活動方針

今年度の活動方針としては、やはり毎年の課題である、役員を選出に関しての問題を改善し、ゼミナール協議会の活動に対しての認知度向上を目標に活動していきたい。例年、ゼミナール協議会の役員は、特定的人数が定まっておらず、各行事を行う際に役員を集めて行ってきた。しかし昨年度は思うように役員が集まらず、必要最小限の人数で活動を行った。これは各ゼミとの繋がりが薄くなり、ゼミナール協議会の活動を知ってもらうという点で憂慮すべき問題であった。なので、今年度は早期に役員的人数を確保し、その後も追加で役員を募集する、という形をとることで、ゼミナール協議会の存在をアピールし、各ゼミとゼミナール協議会の距離を縮めていく。そうすることで、各ゼミ幹事、あるいはゼミに所属する学生一人ひとりがゼミナール協議会の活動に参加しやすくなるような雰囲気を作していきたい。さらにそれぞれの行事について、内容や目的を明確に告知することで、各行事がどのようなものであるのかを学生に深く知ってもらい、ゼミナール協議会の活動に対しての認知度向上に努めていきたい。一昨年度より利用しているゼミ幹事のデータベースを引き続き利用して、各ゼミ幹事とこまめに連絡を取り合い、ゼミナール協議会の活動を広く知ってもらうつもりでもある。

また昨年度の反省を生かして、引き継ぎ時には役員としての意識をしっかり受け継げるよう、配慮したい。

2. 行事に対する活動方針

①ゼミナール間交流レクリエーション

ゼミナール内及びゼミナール間の交流を深めることを目的として行う。今年度もボーリング大会を予定しているが、昨年度の反省点を踏まえて更にこの大会を活性化していきたい。今年度は、大会当日のゲームの進行を

スムーズに行えるよう配慮していきたい。参加ゼミナール、参加人数の増加に伴って、円滑で効率の良いゲームの進行が難しくなってくるので、大会当日は役員を昨年度以上に確保し、参加者が快適にゲームできるよう努めていく。

また参加者が更に楽しくゲームできるようルールも改善していくとともに、参加人数もまだまだ増やしたい。日程の調整も重要な参加の要素であるので、参加するゼミ生のためにもより一層配慮する。

②ゼミナールオリエンテーション関連行事

新たにゼミナールを選択する2年次生に対して、ゼミナールについての情報を提供するために行う。昨年度同様、ゼミナール紹介本、ゼミナールオリエンテーションを開催する予定である。ゼミナール紹介本については、必要人数の役員を集めて役割を分担し、掲載記事についてのアンケートをより多く集められるよう努めていきたい。

またアンケート内容も、2年次生の望む情報を得られるような内容に改善するつもりである。

③インナーゼミナール大会（ゼミ研究発表会）

主にゼミナール間の交流や日常のゼミナールでの研究を公にするための場を提供することを目的に行うものである。今年度はさらに新規の参加ゼミナールや見学者が増えるように、昨年度よりも早めに告知を行いたい。そのためにも自治会、職員の方々との連携が必要になってくるので、しっかりとコミュニケーションをとっていく。各ゼミに対しては、直接的に参加を促し、参加ゼミナールを増やしていきたい。さらにどのゼミナールでも気軽に参加できるよう、インナーゼミナール大会の目的や意義を十分に知ってもらえるような告知の内容を検討していく。また大会当日においても、スムーズに進行出来るよう、サポートする役員の数を増やし、大会前に使用するコンピュータや教室の確認を念入りに行う。インナーゼミナールを活性化していくために、これから多くの学生の意見を参考に検討を重ねていきたい。

●年間の活動予定

4月	新しい3年生ゼミの幹事から代表・会計・役員を選出
5月	学生大会の参加
8～9月	ゼミナール紹介本の作成
10月	ゼミナール紹介本の配布 ゼミナール間交流レクリエーションの開催
11月	ゼミナールオリエンテーションの開催
12月	インナーゼミナール大会の開催
1月	緑丘アカデミアの製作

以上が今年度のゼミナール協議会の活動方針である。

ゼミナール協議会としての活動を通して、ゼミ全体・学校全体が盛り上がっていきけるよう努力していきたい。至らない点もあるとは思いますが、今年度もご協力よろしくお願い致します。